大阪天満宮を中心とした天神祭の領域と天満のコミュニティ

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程
辨野　真理

1.研究目的　日本三大祭の一つである天神祭は、長い歴史を通し、まちの発展とコミュニティ形成に深く関わってきたが、祭そのものを支える組織と各組織を支えるコミュニティの継承が課題となっている。本研究では天神祭を対象に、大阪天満宮を中心とした祭の領域と祭を支えるコミュニティを探り、祭の持続可能性について考察する。

2.研究方法　本研究では、まず大阪天満宮の影響圏域を氏地・祭会場・可視領域・認識領域の 4 要素に視点をあて、各領域の広がりの相違から捉えた。氏地は、祭時期に掲げられる提灯(ちょうちん)を氏地の判断基準として、文献等とヒアリング調査(H28.12)により過去と現在の領域を捉えた。祭会場は、提灯・注連縄(しめなわ)等の物的装飾や行宮祭(あんぐうさい)、陸渡御(りくとぎょ)・船渡御(ふなとぎょ)のルート、花火打上位置や交通規制、観覧席や出店の位置を資料・文献及び図上と現地調査(H28.10)から捉えた。可視領域は、現地調査により、境内の施設や樹木等の視認可能な範囲を地図上にプロットした結果から捉えた。認識領域は、まち歩き参加者(13 名)へのアンケート調査(H28.7)による「祭らしさ」の景観要素及び観光・歴史資源分布状況から捉えた。次いで、コミュニティについては、「講(こう)」の 1 つ鳳講(H28.11)と大阪天満宮(H28.12)へのヒアリング調査を通じて、祭を支える組織や組織の構成員である人の実態から捉えた。

3.祭の領域　**歴史的背景**：現在の天神祭は渡御行列を組み、天満宮を出発し（陸渡御)、大川を行き来し（船渡御)、陸に上がり宮入する。しかし、起源は大阪天満宮が天暦 5 年(951 年)から毎年「夏越(なごし)の祓(はらえ)」として、鉾流神事(ほこながししんじ)を行ったことにあるとされている。大川に鉾を流し、流れ着いた先を御旅所として、船渡御の目的地とする神事であり、これが天神祭に繋がった。江戸時代に初めて御旅所の位置が固定されるが、現在までに位置は 2 度、ルートも 3 度変更された。**氏地の領域**：江戸時代は大阪天満宮の門前を除くと、当時の大川を下る船渡御コース沿い及び御旅所周辺に氏地があった。現在は、雑喉場(ざこば)の御旅所付近等では消滅し、飛び地としては千代崎の行宮付近のみが残っている。氏地領域は、現在の船渡御ルート沿いである大阪天満宮の北部や東部に広がった。**祭会場**：祝祭空間として祭への連帯感を創出する物的装飾は、陸・船渡御コース及び行宮付近で行われる。人の動きは主に交通規制の行われる大阪天満宮周辺と南部及び花火が見えて露店の並ぶ大川沿い、さらに天神橋筋商店街で発生

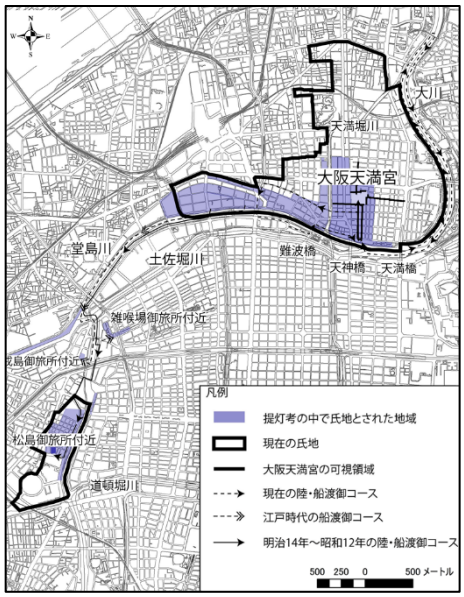

図１　氏地・可視領域と渡御コース

する。源八橋・都島橋等の橋上は天神祭において貴重な視点場となっている。**可視領域**：可視領域は南北の通りと東西の筋で構成される短冊型の町割の影響で、大阪天満宮から東西南北方向の道路上約 350m～400m 程度の広がりである。**認識領域**：最も評価の高い大阪天満宮を近くに感じる景観要素は大門の存在（4.54 点/5 点）、祭らしさでは提灯（4.92 点/5 点）である。天満の資源分布から捉える認識領域は、観光資源の認知度が高く、歴史的資源が非常に低い影響で天神橋筋商店街沿いと大阪天満宮南部に広がっている。以上のことから祭の領域では、氏地の領域より祭会場が小さく、可視領域は祭会場内の道路の一部のみとなっていた。また、認識領域では祭らしいとされた提灯はほぼ陸渡御コース沿いにのみ設置され、観光資源・歴史的資源の認知度も大阪天満宮北部では低い等、領域による差が確認された。また各領域の重なる、現在の主要な祭の領域は、大阪天満宮から南の大川の間及び大川沿いの地域であり、4 要素から捉えた最も大阪天満宮からの影響が強い領域であるとわかった。

4. 天神祭を支える人々の実態　天神祭を支えるコミュニティを組織と、組織の構成員からみる。**組織**：地縁または同業者・社縁で結束した奉仕集団である講社が祭を支え、講社を取りまとめる講社連合が存在する。現在 25 講社が連合に所属するが、うち 24 講社が天神祭にて奉仕を行う。大阪天満宮職員は全員、協賛企業等も所属する天神祭渡御行事保存協賛会の事務職員であり、祭当日は神事・サポーター・責任者の 3 役を果たす。講社の数は時代により増減を繰り返すが、現在は協賛企業と共に減少傾向にある。天神祭の予算は赤字であり、人手も不足している。氏地外の人が毎年約 500 名ボランティアとして祭に参加する。**構成員**：地縁の講は旧町割による町、旧町割の町が集まった地区に在住する氏子が紹介制で加入し、構成員となる場合が多い。よって、天満における地縁コミュニティは旧町割が基礎となる。菅南地区で鳳神輿を護持する鳳講の場合は、旧町割の各町会代表者等による地域活動協議会（菅南八町連合会）内の一部門として「鳳講」が組み込まれることで、地区内のコミュニティとつながりをもつ。また、活動資金も各町会と氏地在住者の寄付金によって運営される。菅南地区の人口は増加しているが、鳳講の講員数は変化していない。一方、同業者・社縁の講は構成員に氏地外在住の大阪市・大阪府内の関係者と広がりがあることがわかった。

5. まとめ　天神祭により地域に一体感が生まれ、地縁コミュニティが継承されていた。祭の存続には今後、影響の薄い大阪天満宮北部・堂島・千代崎からの積極的な祭への参画等による支援組織の強化や、天神祭予算の財源確保、ボランティアを受け入れる仕組みの拡充が重要となる。講に関しては、新規講員の獲得や講の運営に携わる講員の育成、氏地外からの加入希望者の受け入れに対する各講での合意形成、講を支える地縁の基盤となる旧町名の引き継ぎも必要であると考える。

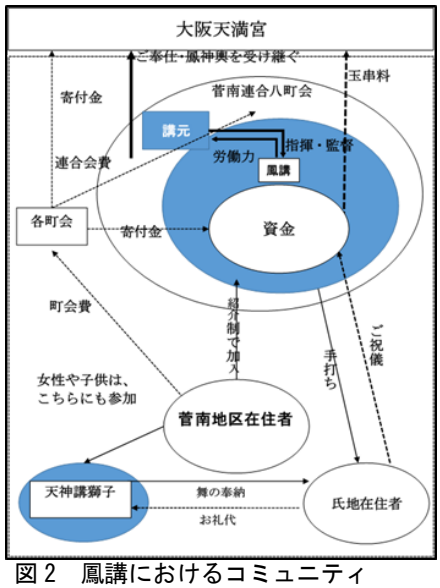

図 2　鳳講におけるコミュニティ